

ロッシーニ時代の社会、劇場と風俗

(東京二期会オペラ劇場《シンデレラ》1998年プログラム掲載のエッセー)

水谷 彰良

初出は1998年2月7～9日、東京二期会オペラ劇場によるロッシーニ《シンデレラ》上演(東京文化会館。'98都民芸術フェスティバル参加公演)のプログラム(48-51頁)。シンデレラをラ・チェネレントラとするなど表記を変更し、書式も変えてHPに掲載します。(2012年12月)

ロッシーニの時代

今からちょうど200年前[註:本稿は1998年の執筆掲載]の1798年2月9日、フランス軍がローマに入城して教皇ピウス6世は逃亡、共和政府が樹立された。

このフランス軍のローマ占領は、同地のオペラ界に大きな変化をもたらした。舞台への女優起用を禁止して女役をカストラート(去勢歌手)や女装男性が歌い演じるオペラの伝統に終止符が打たれたのである。ローマや教会国家の一部では、1588年に教皇の発布した禁令に従ってバレエを含むすべての舞台が男性だけで行われていたが、進駐軍は女装を風紀紊乱と批判、カストラートは追放された。ローマのオペラで初めて公式に女性歌手が歌うのはこの占領から半年後、《セビーリャの理髪師》や《ラ・チェネレントラ》が初演される十数年前の話である。

イタリアを支配したナポレオンが敗北し、ウィーン会議で各国の王政復古と国境の線引きが定まったのが1815年、オペラ作曲家ロッシーニの人生もここで大きな転機を迎えた。この年を境に彼は北イタリアからナポリに活動拠点を移し、それから僅か8年の間に《イギリス女王エリザベッタ》から《セミラーミデ》まで、実に20作にのぼる傑作群を生み出すのである。ナポレオン戦争の混乱の中で世に出たロッシーニは、戦後の復興バブル時代に才能を開花させ、ヨーロッパ中に一大ブームを巻き起こした。彼のオペラ・ブッフアにみなぎる哄笑、狂気にも似た錯乱……一時的に登場人物全員の頭がおかしくなったりする……は、混乱状況に置かれた人間の発作的狂躁やエネルギーの爆発と似ているが、それは時代の空気を反映したものなのである。

ローマのヴァッレ劇場

当時ローマで一番大きなオペラハウスは、《セビーリャの理髪師》を初演したアルジェンティーナ劇場だった。謝肉祭の期間だけ開場し、どちらかといえば格式の高いこの劇場よりも庶民的で、春と秋にも公演を行ったのが《ラ・チェネレントラ》を初演したヴァッレ劇場である。

ヴァッレ劇場は1726年に建造された木造建築の粗末な芝居小屋だった。現在の劇場は後に再建されたもので往時の面影はないが、《ラ・チェネレントラ》初演直前までローマに滞在したスタンダールによれば、内部に樅材が剥き出しで使われ、フランスの田舎の役所より見すばらしかったという。規模も小さく、5層構造なのに栈敷のボックスは27しかない。アルジェンティーナ劇場のそれが186、ミラーノのスカラ座が194だから、その小ささが想像できよう。

平土間は番号付きの椅子席で庶民がひしめき合い、栈敷は貴族たちに貸し切られていた。場内の壁に貼られた警察の布告には、他人の席を占拠した者はナヴォーナ広場で百叩きの刑、狼藉をはたらく者には5年間のガレー船送りの刑を課すと書かれていたから、観客のマナーも相当悪かったらしい。ローマに限らず昔のイタリア人は平気で周囲に唾や痰を吐いたから劇場の壁や床は汚く、うっかり壁にもたれようものならひどいことになったという。栈敷の貴族たちも当たり前のように平土間へ唾を吐き、残飯を投げ捨てた。

オーケストラの編成も随分と小ぶりで、後にヴァッレ劇場を訪れたベルリオーズはチェリストが一人しかいないと呆れている(しかも本業は金銀細工師だった)。ロッシーニは過去にこの劇場でオペラを発表していたから管弦楽の編成や観客の好みを熟知しており、《ラ・チェネレントラ》では比較的小規模でも効果を発揮するオーケストレーションを施し、滑稽な声楽アンサンブルをたっぷり盛り込んで娯楽性を高めている。

劇場の中の女性たち

人々が劇場に来るのはそこが「大きなサロン」であり、社交場だったからである。オペラがまともに聴かれた

のは初日や最初の数回だけ。それ以外はみな舞台そっちのけでお喋りやトランプ遊びに興じていたから、音楽に集中しようと思えば平土間の最前列か舞台に近い桟敷に座らねばならなかった。

イタリアの上流婦人たちは夫ではなく「チチスベオ（お付の騎士）」と呼ばれるお供の青年を従えて観劇した。モンテスキューはそれを、「馬鹿な民族のつくり出した滑稽な習慣」と笑った。フランス人には妻へ若い男をあてがう夫の気が知れないのだ。しかし、当時のイタリア紳士は妻にチチスベオを付けるのを男の甲斐性と信じていた（あるいは妻たちからそう信じ込まされていた）。その結果、たくさんの「寝取られ亭主」が誕生したのも事実。

劇場へ女性が一人で行くのは「ふしだら」と見なされた。平土間に一人でいるのはたいてい商売女で、彼女たちは劇場係に賄賂を渡して自由に入場し、客を引いていたのである。大衆席の平土間には軍人や旅行者、オペラよりも女を求める男と娼婦たちであふれていた。

初日ともなれば婦人たちは目いっぱい着飾り、大きな羽飾りのついたヴェネツィア製の帽子をかぶって桟敷の最前列に陣取った。後ろの客はいい迷惑だが、そんなことはお構いなし、そうやって平土間や向かいの桟敷の人々に自分の存在をアピールするのである。女性たちは上演中も片時も隙を見せぬよう気を配っていた。常に四方八方からオペラグラスで視線を浴びていたからである（それはもっぱら舞台よりも、客同士の観察のために使われた）。

まだ電気もガスもない時代、照明は蝋燭だけだから劇場の中は暗い。桟敷は鍵付きの小部屋になっていて前面にもカーテンがあったから、上演の間じゅう閉め切って密室にしている桟敷もあった。劇場は恋愛や逢引きの場でもあり、周囲の騒音を良いことに「失樂園的快樂」に耽ることもできたのである。教皇が事態を憂慮して桟敷の間仕切りを撤廃させたこともあったが、公然猥褻を助長しただけだったという。もっともそれは17世紀末の話で、19世紀には観客のお行儀もずっと良くなっていたのだが……。

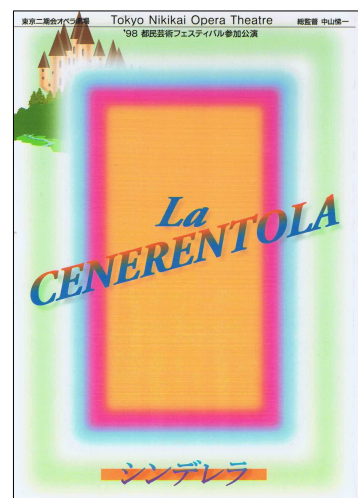
「音楽だけがイタリアで生きている」「この美しい国では恋愛だけをしていれば良い」といわれたイタリアでは、オペラハウスは社会そのもの、桟敷は家も同然だった。女性が一番美しく輝いて見えるのも、桟敷でその横顔が蝋燭の炎に照らし出された時だ。詩人ハイネはイタリアの薄暗い劇場でかいま見た、ぞくつとするような女性の美について記しているが、彼女たちが美しいのはオペラの魔力が官能に影響を及ぼし、「移り変わる旋律が女性の魂に思い出や欲望、怒りといった一連の感情を呼び覚まし、それらが表情や顔色に変化を与え、瞬間瞬間に瞳へ映し出されるから」なのである。

ラ・チェネレントラ＝シンデレラに託されたもの

「昔、一人の王様がいました……その王様はお妃候補の中から一番純真で善良な娘を選びました」——オペラの幕開けで主人公の口ずさむ端唄の中にシンデレラ物語のすべてが集約されている。虐げられた不幸な少女の前に王子様が現れ、お妃として迎え入れる。実に他愛のないハッピーエンドではないか。ロッシーニは幸せな結末だけでなくヒロインが死を迎えるオペラ・セーリアも好んで書いたが、観客の受けは悪かった。人々は《オテッロ》のような悲劇にさえ、ハッピーエンドを求めたのである。

先に述べたように、イタリアは少し前まで列強諸国が争奪戦を繰り広げる戦場となり、国土は荒らされ民衆も略奪され続けてきた。流血はたくさん、戦争の悲しい思い出はさっさと忘れてしまいたい、と誰もが願った。イタリア人にとって真のハッピーエンドとは、国家が統一され、民族の誇りを回復することにあつたのに、それを口にするのを禁じられていたから、人々はシンデレラの物語に幸せな未来を夢みたのだ。

だが、《ラ・チェネレントラ》は本当にハッピーエンドなのだろうか。残念なことに、現代の私たちは「そんなに甘くない」現実を知っていて、王子様と結ばれた娘さんが結婚後にさまざまな「いじめ」を受け、この世で一番不幸に思えたりする。へそ曲がりの筆者には、《ラ・チェネレントラ》のフィナーレこそが、その後の不幸の始まりに思えてならないのである。



東京二期会オペラ劇場《シンデレラ》プログラム(1998年)